

## 1. 情報端末を活用した新たな学びへの期待

公立の小中学校において1人1台の情報端末が整備され、授業での活用が本格的に始まりました。1人1台の情報端末を積極的に活用して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められています。その学びは、授業にとどまらず、家庭での学習にもつながることが期待されています。

しかし、情報端末を活用した授業を参観すると、従来の教師主導の授業で活用する場面が多く見られ、学習者主体の活用までは至っていないケースも見られます。教師が主導して、授業が効率的に進むことも大切なことではありますが、これからの学びでは、教師主導の授業だけでなく、**児童生徒が学習のツールとして情報端末を活用して、自ら学びをつくり出すことが求められます。**

さらに、1人1台の情報端末環境とあわせて、クラウド環境を有効活用することによって、従来の紙（ノート）では実現できなかった新たな学びとして、データを共有して学び合うなど、共同編集や共同制作などの協働的な学び等の学習形態が大きく変わってきます。

下の写真は、西米良村立村小  
学校での**児童が進行役になって授業を進めるガイド学習の様子**です。児童が1人1台端末に自分の考えをまとめ、内容を発表するように、進行役の児童が進めています。授業者の教師は、板書や助言などファシリテータとして関わります。このように、学習者主体の学びと1人1台端末の活用を関連づけながら、新たな学びを構築している学校がみられるようになりました。

**2. 学校教育の質的向上**  
変化が激しく、予測が困難である社会を生き抜くには、自ら問題



児童が進行役になって授業を進めるガイド学習の様子

# 学校教育の質の向上にICT教育をどう組み込むか

中村学園大学教育学部 教授 山本 朋弘



と向き合って試行錯誤しながら解決していく能力が必要となり、これからの教育では「自立した学習者」を育成していくことが求められています。特に、「学校教育の質」を向上させていくには、この「自立した学習者」というキーワードは極めて重要であり、**学習者主体のICT活用と関連づけて、各学校が特色を活かしたビジョンや教育課程を考えていくことが求められます。**

例えば、教師が児童生徒に紙を配付して考えさせる授業が、紙ではなく情報端末に変わったただけでは、授業の効率化は進みますが、本当の意味での「学習者主体の活用」とは言えないのです。教室のすべての子供が同じ内容や方法で一斉に学ぶのではなく、1人1人が異なる内容や方法で学びを進めていくことが考えられます。これからは、児童生徒が活用するツールを自ら考えて、必要に応じてICTを積極的に活用し、自らの学びを自立化させることが求められます。そして、自立した学びが深い学びに進展するように、教師は寄り添いながら子供に伴走することなのです。

## 3. 個別と協働が同居した学び

令和の日本型学校教育の構築として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められています。が、一体的な充実を図るには、どのように進めれば良いのでしょうか。先進的な取組を進めている学校を参観すると、**個別最適な学びと協働的な学びが教室の中で同居している様を見かけます。**あるグループは、それぞれが分担した内容を個別に取り組んでいますし、他のグループでは話し合いながら、共有ボードにまとめていく様子が見られます。下の写真は、福岡県田川市の後藤寺小学校の授業風景です。必要に応じて子供たちがアク



座学から脱却した学びの姿

タイプに動いてグループとなり、情報端末を用いて学習を深めています。

個別最適な学びにおいては、教材や資料を学習者が自分で選んで、自分で決める過程が大切になります。個別最適な学びでは、学習の内容や方法を自己選択や自己決定ができるように、教師が学習者に働きかけることが必要です。

協働的な学びでは、1人1台端末やクラウドサービスを用いて、友だちと協力しながら、グループで共同編集や共同制作を進めていきます。話し合う活動だけでなく、クラウドを用いた協働的な学びを取り入れることによって、学習の深まりが期待されます。例えば、グループでの発表場面において、読み原稿をクラウド上で共同編集する実践も見られます。共同編集で役割を分担することで、コミュニケーション力の育成にもつながります。さらには、子供たちがクラウドサービスのアンケート機能を用いて、より多くのデータを集める調査学習を進める事例も見られます。

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るには、長期的な見通しを持って学校全体で取り組む必要があります。また、1つの学級が進めるだけでは十分ではなく、学校全体で継続的に取り組んでいく必要があります。そのためには、校長や教頭等の管理職、校内のリーダーが学校全体に働きかけ、教師が柔軟な考え方をもち、学校全体の授業観（授業の見方）を変えていくことが求められます。

#### 4. 教科等横断的な活用

学校や学年の全体でICT活用が進んでいくと、1つの教科だけでなく、教科等横断的にICT活用が進んでいきます。学習者が習得した活用スキルは、教科等の中で転移しながら、さらに高まっていくことが期待できます。例えば、算数や数学で学習した表やグラフの作成は、社会科のデータを整理する際に用いることも考えられます。子供たちから他の教科でもやってみたら、この教科でもやってみたいといった主体的な活用も見られるようになります。教科等横断的なICT活用では、学習の基盤となる活用スキルが活かされるようになります。そのためには、教師が子供たちの活用をあまり制限せずに、子供たちの主体的な活用は出てくるよう、学校全体で共通理解を図りながら進めていくことも大切です。

〈連載テーマ②〉

## 「ICTを活用した教育」

#### 5. GIGA環境での管理職のリーダーシップ

GIGAスクール構想によって整備された1人1台の情報端末を有効に活用するには、学校全体で情報端末の活用を推進していくことが重要です。学級によっては、1人1台の情報端末を積極的に活用できておらず、今一歩本格的に踏み出せず、格差が生じている現状も見られます。また、活用しているものの、児童生徒の主体的な活用までには到達しておらず、教師の指示で活用している学級も見られ、学級間で「質的な格差」が生じているようです。

このような「質的な格差」を生じないようにするには、校長や教頭のリーダーシップのもと、学校全体で計画的に進めていくことが必要となります。児童生徒が主体的に活用していくよう、担任教師等に働きかけていくことが求められます。

「自立した学びがこれから必要である」ことは頭の中では理解できていても、多くの教師がなかなか実践化まで踏み出せずにいます。多くの教師が、ICTを授業で活用できると面白そうだと思いつつも、活用そのものが目的化しないようにと悩んでいる段階でもあります。担任教師が、これまでになかった授業スタイルに挑戦して、ICTの挑戦的な活用を進められるよう、校長や教頭等の管理職には、担任教師の背中を押し上げるように積極的に働きかけることが求められます。

#### 6. 最後に

これからの学校では、子供たちのICTスキルが、教師のICTスキルを超えることも出てきます。児童生徒の情報活用能力が高まれば、担任教師が高い操作スキルを身につけておこななくてもいいのです。まずは、教師が端末活用を積極的に取り入れ、教師自身が試行錯誤しながら、失敗体験から学び、授業での成功体験を積み上げていくのです。情報端末をどの場面でもどのように活用させるか、教師自身が自ら考えて、自分の学校や学級の実態に合わせた積極的な活用を進めていくことが求められています。これからの教師は、コーチングの考え方をもち、子供たちの活用に関わり添う姿勢を身につけることが重要です。